様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１３１５６

研究課題名（和文）万歳唱和の新研究――東アジア礼制比較史研究の総合化に向けて

研究課題名（英文）A New Study on Banzai(Chanting "Wan Sui"): Towards the Synthesis of Comparative History of East Asian Li-System

研究代表者
三田　辰彦（MITA, Tatsuhiko）

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：００６４５８１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国王朝の儀礼における万歳唱和の位置づけを考察したものである。具体的には、漢代から唐代までの王朝儀礼にみえる万歳唱和の位置づけを分析し、儀礼で果たした役割を明らかにした。また、本研究の研究成果を学際的・国際的に発信することにより、東アジアの礼制を比較するうえで好適な事例を提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
万歳唱和という現代でもなじみのある所作を長期スパンで考察し、その推移を国内外において専門の地域・時代を異にする歴史学研究者に向けて成果を公表した。その結果、各時代における多様な受容のありようが見えてきた。比較研究を促進するケーススタディとして一つの参照例を付け加えることができた点に学術的意義があると言えよう。また、万歳唱和というなじみのある所作がどのような場面で繰り返し行われてきたか、その具体的様相をあえて問いに付すことは、我々の社会で「伝統」とみられる所作を問い直すことにもつながる点で社会的意義があると言えよう。

研究成果の概要（英文）：This study examined the positioning of the "Wansui Chanting" in ceremonial practices of Chinese dynasties. Specifically,we analyzed the positioning of the Wansui Chanting in dynastic rituals from the Han Dynasty to the Tang Dynasty and elucidates its role in these ceremonies. Furthermore, the research disseminated its findings interdisciplinary and internationally, providing suitable examples for comparative studies on East Asian Li-System.

研究分野：六朝礼制史

キーワード：万歳唱和　礼制　漢-唐　東アジア　比較史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）背景

儒教理念に基づき、社会秩序の規範として古代中国で生み出された礼制は、変質を被りつつも古代の朝鮮諸国に受容され、さらに古代日本においても段階的・選択的に受容されてきた（大隅清陽『律令官制と礼秩序の研究』吉川弘文館、2011 年，榎本淳一「比較儀礼論」（『日本の対外関係２　律令国家と東アジア』吉川弘文館、2011 年）など）。
一方、こうした古代日本の礼制の受容を東アジア史の枠で叙述し直すならば、古代中国での礼制の長期的展開を踏まえた動態的な把握が必要不可欠である。中国古代史研究でも礼制研究は日本・中国ともに進展を見せていることからすれば、今後は東アジアの枠での総合的な礼制史の叙述が求められると想定され、かつそれが実施可能な状況が見えてきている。以上が大きな学術的背景である。

（２）動機

如上の背景を踏まえ、本研究では中国と日本とを架橋する事象、すなわち儀礼のなかで行われる万歳唱和に着目する。万歳唱和は現代日本においてなお有力な「型」として踏襲されているが、それを単なる「伝統」と解して終わりとするのではなく、その型のもつ強度を生み出す観念がいかに作られてきたのかを歴史的な視点から問い直す必要がある。本研究の動機はこの点にあると約言できる。

２．研究の目的

将来的に、東アジア礼制史を総合的に叙述する際、根幹となる古代中国の礼制がいかに成立してきたかの研究は欠かせない。本研究は、東アジア礼制比較史研究の総合化を促進するために、中国古代史・日本古代史の橋渡しとなる事例としての万歳唱和を考察し、学際的研究のハブターミナルとして貢献するねらいがある。本研究期間においては、特に中国古代の諸儀礼における万歳唱和という所作がいかに一つの型をなすようになったのか、それは当時の人々の心性といかなる関連性をもつのかを通時代的な流れにおいて解明することを目的とする。

３．研究の方法

本研究の柱は以下の２点である。

（１）諸儀礼にみえる万歳唱和の位置づけを通時代的に分析し、儀礼で果たす役割を解明。

万歳唱和は複数の儀礼のなかに確認できるが、全部ではない点がこの所作の特徴を示すヒントとなると考えた。万歳唱和が複数の儀礼にまたがって登場することから、個々の儀礼の特性を象徴するよりは、むしろある儀礼グループ一般に通じる性格を最大公約数的にあらわすことが想定される。かかる仮説を検証すべく、万歳唱和のみられる儀礼の共通点を探り、儀礼における万歳唱和の性質を解明する。また、万歳唱和にはタイミングがある。儀礼の式次第のうちどの時点で万歳唱和が行われるのかを分析することで、儀礼の中で果たす役割を明らかにする。分析対象の時代は、儀礼の式次第を確認できる前漢から唐中期（前２世紀～後８世紀）という長期にわたるが、一つの型としての強度を探るという観点からいえば、長期での観察は必須である。この長期スパンを経て儀礼の中での性質や役割に変化があるか否かも明らかにする。

（２）儀礼以外の場における万歳唱和の具体的位相と比較し、儀礼での特徴を解明。

万歳唱和の用例一般をまとめた「研究成果」は、18 世紀後半中国清朝の考証学者である趙翼の『陔余叢考』（巻二十一・万歳）があり、ある程度まで類型化されて参照に値する。だが、全ての万歳唱和の事例を網羅しているわけではなく、かつ唐から宋（10～12 世紀）にかけて専ら皇帝の尊称を指すものへと変化した点に専ら焦点を当てている。そのため、本研究の主たる対象である儀礼内の所作たる万歳唱和と、かかる変化との相関関係などについては検討の余地が残されている。そこで本研究では、漢から唐にかけて、万歳唱和が誰から誰に向けて行われているかに注目する。儀礼の場・儀礼以外の場で、唱和する側・される側の関係性がいかに変容あるいは継続したか、それぞれの場を通時代的に比較考察することで、儀礼における万歳唱和の特徴を解明すると同時に、儀礼以外の場で人々が万歳唱和をどう認識していたかに切り込んでいきたい。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

①万歳唱和に関する史料収集。研究初年度（2020 年度）から COVID-19 が世界的に流行し、国内でも緊急事態宣言が出されるなど、報告の場がいかに担保されるか先の読めない状況であった。そこで成果報告は後に回し、中国・台湾で作成された電子テキストを活用し、万歳唱和に関する記録を幅広く収集することを優先した。その過程で、北宋・南宋の随筆雑記から万歳唱和に関する考証を検出した。これらの文献は、人臣に対して万歳を唱和した過去の事例への違和感から記

されたと思しく、〈人臣に対する万歳唱和への違和感〉という新たな分析視座を得た。この視座をもとに、最終年度（2022 年度）では研究報告を行うことができた（後掲「主な発表論文等」参照）。

②唱和されることば。「万歳」に類する語には「万寿」「万年」などがあるが、唐代までの史料の用例に照らせば、声に出して呼ぶ動作（「称」のほか「唱」「呼」など）と併用される語は「万歳」であり、類似の意味をもつ「万寿」「万年」等は唱和の文脈での用例はほぼ皆無であったことが判明した。

③儀礼における万歳唱和の位置づけ。唐代中期に編纂された礼典『大唐開元礼』を中心に、漢代から唐代中期までの事例と対照して論じた。その成果は「『大唐開元礼』にみえる万歳唱和」（『文化』86 巻第 3・4 号、2023 年発行予定、現在第三校まで終了）に結実したが、いま簡潔に結論を示すと以下の通りである、まず、儀礼の場としては、即位儀礼・禅譲儀礼、元会儀礼・封禅儀礼のほか、王室（皇帝・皇后・皇太子）の慶事に関わる儀礼に見られる。『大唐開元礼』では元会儀礼を基礎として王室慶事の儀礼に援用するという方向性が確認された。また、万歳唱和の行われるタイミングは主たる儀礼の祝賀のパートを締めるもの、大宴会における上寿の祝賀を締め、飲食に移る合図となるものがある。前代においてメインの儀礼で行っていたものを『大唐開元礼』では宴会に一本化したものもあるなど、元会儀礼の朝賀型・会型とでもいうべき形式で整序されたことを明らかにした。さらに、『大唐開元礼』の時点で万歳唱和はなお皇帝に向けて一元化されておらず、皇后・皇太子に向けて行うよう設計されていた。この知見は、「万歳」が皇帝に専ら向けられる時期の上限について一つのヒントを与えるものとなるであろう。

④儀礼の場以外における万歳唱和の様相。前項③で述べたように儀礼の場では万歳唱和は上寿の祝辞を伴う礼＝上寿礼に組み込まれる。一方、儀礼以外では「長寿」から派生した場面にしばしば見られる（長生きする→生き永らえる喜び→戦争や反乱など命の危機を脱する喜び）ことが判明した。上掲「３．（２）」の『陔余叢考』では喜ばしいこと一般として分類していたが、軍事行動を伴う場面で行われるという方向性も確認される（戦争・反乱の危機脱出を喜ぶ、危機の策源地たる「悪の首謀者」の滅亡を喜ぶ、決起集会で叫ぶなど）。

⑤研究交流。成果の公表は最終年度（2022 年度）にまで押してしまったが、主に③の観点から論じた成果については、中国学研究者はもとより、日本古代史を含む東アジア史研究者や、さらには中国の中国史研究者に向けて、オンラインで報告することができた。また予てより参加を目指していた中国側主催の研究交流会がオンラインで実現し、中国・台湾・日本の若手研究者間で中国古代中世史研究の新たな方向性を討議する場に参加できた（後掲「主な発表論文等」参照）。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

①万歳唱和に関する先行研究では、「万歳」が皇帝の専称となる時期について意見が分かれていた（例えば王春瑜『“万歳”考」（『歴史研究』一九七九年九期）では前漢武帝を画期とするが、朱立平「也談“万歳”」（『歴史研究』一九八〇年第一期）では北宋以後とする、など）。本研究の成果【前項４．（１）③】に即していえば、礼典上とはいえ唐代中期の時点で皇帝以外にも用いており、儀礼面から新たな知見を提示できたと考える。

②『大唐開元礼』における万歳唱和の位置づけを整理した結果、皇帝・皇后・皇太子それぞれの「臣下」が「君主」に向けて万歳を唱和する儀礼がみられ、皇帝・皇后・皇太子を礼制上特別視する点を指摘した従来説を補強するものとなりうる（従来説として、例えば松浦千春「漢より唐に至る帝位継承と皇太子―謁廟の礼を中心に―」（『歴史』第八〇輯、一九九三年）、江川式部「唐朝祭祀における玄酒と明水―『大唐開元礼』の記載とその背景―」（『駿台史学』一一三号、二〇〇一年）など）。

③万歳唱和という行為を慣行化したベクトルとして、朝廷の儀礼と軍事行動という二つの方向があり得ることが指摘できる（【前項４．（１）④】より）。この点は万歳唱和を漠然と歓喜の発露と捉える従来的な見方からは現れえなかったものであり、一定の意義を有すると思われる。

（３）今後の展望

国内外の研究報告での反応からみて、唐以前からの長期スパンをとり、日中を架橋する事象の推移を示すことで比較研究を促進し得るとの確信を得た。ただし、上掲「４．（１）②④」のように報告論文等の形で公表できなかったものもあり、特に④関連の作業を通して、万歳唱和を〈長寿の願い〉というより広い文脈の中で考察する余地があることに気づいた。この点は上寿礼に関する新科研の遂行と併せて研究を深め、今後の公表に努めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 三田辰彦	４．巻 86巻（3・4号）
２．論文標題 『大唐開元礼』にみえる万歳唱和	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『文化』	６．最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 三田辰彦
２．発表標題 『大唐開元礼』にみえる万歳唱和
３．学会等名 第70回東北中国学会大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 三田辰彦
２．発表標題 漢唐時代の王室儀礼における万歳唱和
３．学会等名 第54回東アジア后位比較史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 三田辰彦
２．発表標題 唐代 ” 舞蹈万歳 ” 再考 ―以《大唐開元礼》為線索
３．学会等名 "中古時代的文本世界与物質世界"青年学者工作坊（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 三田辰彦
２．発表標題 周楊《南朝墓葬礼楽符号的建構－再論“竹林七賢与栄啓期”題材ホウ砌磚画》評議
３．学会等名 第十三届中国中古史青年学者聯誼会（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関